

「子育て中の母親用被援助志向性尺度」の開発 および関連要因の検討

The Development of “the Help-Seeking Preference Scale for Mothers about
Child-Rearing” and Consideration of its Related Factors

悉知弥生・宮岡佳子

Yayoi SHITCHI, Yoshiko MIYAOKA

要 旨

子育てに心配やストレスを抱える母親が多い一方で、援助を必要としても積極的に援助を求めることができない母親の存在が指摘されている。そこで本研究では、研究 1 にて「子育て中の母親用被援助志向性尺度」の開発を行い、研究 2 にて母親の被援助志向性と育児不安および自己隠蔽との関連を検討することを目的に質問紙調査を実施した。

研究 1: 「子育て中の母親用被援助志向性尺度」の項目は、予備調査および「中学生の友人、教師、家族に対する被援助志向性尺度」(本田ら, 2011) を参考に研究者らが作成した。因子分析の結果から、22 項目 4 因子構造とし、それぞれ、「援助資源の自覚」、「援助への期待」、「援助抵抗の低さ」、「情報希求」と命名した。また、内的整合性および基準関連妥当性が示された。

研究 2: 研究 1 で作成した「子育て中の母親用被援助志向性尺度」を従属変数、育児不安尺度の下位尺度である「中核的育児不安」、「育児感情」、「育児時間」と日本語版自己隠蔽尺度を独立変数として重回帰分析を行った。その結果、「自己隠蔽」($\beta = -.33, p < .001$)と「育児感情」($\beta = -.28, p < .01$)は負の影響、「中核的育児不安」($\beta = .22, p < .05$)は正の影響を与えていた。

これらのことから、育児不安は被援助志向性を促進し、自己隠蔽は被援助志向性を抑制することが明らかとなった。今後は、育児不安だけでなく、自己隠蔽という母親個人の特性にも注目していく必要があると思われる。また、援助に繋がりにくい母親を減らすためにも、支援者からの積極的な介入が重要であろう。

Key words: 母親 子育て 被援助志向性 育児不安 自己隠蔽

Abstract

There are a lot of mothers who worry about child-rearing and they need help. But some mothers don't actively seek help for their child-rearing. We aimed to develop "the help-seeking preference scale for mothers" (study 1) and to investigate its relation to child-rearing anxiety and self-concealment (study 2) by administrating questionnaires.

Study 1: We developed "the help-seeking preference scale for mothers about child-rearing" by referring to the scale by Honda et al. (2011) and the results of interviews from mothers. A factor analysis showed 22 items and 4 factors. We labeled them as "awareness of resources for help", "expectation for help", "low resistance for help", and "information seeking". The scale had a high internal consistency and high criterion-related validity.

Study 2: Multiple regression analysis was performed using "the help-seeking preference scale for mothers about child-rearing" as a dependent factor and subscales of the child-rearing anxiety scale and the self-concealment scale as independent factors. Self-concealment ($\beta = -.33$, $p < .001$) and feeling about child-rearing ($\beta = -.28$, $p < .01$) negatively influenced to the help-seeking preference and that a main factor of child rearing anxiety ($\beta = .22$, $p < .05$) positively influenced to it.

This analysis revealed that rearing-child anxiety accelerated the help-seeking preference, while self-concealment suppressed it. A lot of attention should be paid to self-concealment not only to rearing-child anxiety. Active invention by professional supporters may be important to decrease a number of mothers who have a difficulty to ask for help to others.

I. 問題と目的

日本労働組合総連合会（2013）によれば，母親の 86.8%が子育てにストレスを感じており，NPO 法人子育て学協会（2014）の調査によれば，59%の母親が育児に心配を抱えていると回答しており，多くの母親が子育てにストレスや悩みを抱えていることがうかがえる。

育児ストレスや育児不安に関する研究は今まで多く行われてきた。その中でも，母親側の要因として，子育てにおいて必要があるのに援助を活用しなかったり，援助がほしいと声をあげなかったりする母親たちの存在が指摘されており（小嶋，2004），子どもに育てにくさを感じても積極的にサポートを求めようとしない母親の存在が指摘されている（状家，2015）。ところで，田村・石隈（2002）によれば，被援助志向性（援助を求めようという気持ち）が弱い人は，危機に直面しても援助をうまく求められず，援助資源を活用できないとされている。これまでに，母親を対象とした被援助志向性の研究はごく一部行われているが，母親の被援助志向性を測る指標は研究者によって様々であり，一貫性のある調査が行われているとは言えない。さらに，子育て中の母親を対象とした被援助志向性尺度はいまだ開発されていない。本研究では母親を対象とした被援助志向性研究において，有用な尺度を開発することを目的に，「子育て中の母親用被援助志向性尺度」を作成し，信頼性と妥当性を検討

する（研究 1）。

また、子育てに悩む母親を適切に支援へとつなげていくため、母親の被援助志向性に影響を与える要因についても検討する必要があると考える。これまでに被援助志向性との関連を調べた研究では、個人の抱える悩みが深刻なほど被援助志向性が高くなることが明らかとなっているが（永井, 2010）、母親を対象とした検討は未だ行われていない。小嶋（2004）や状家（2015）によって、悩みを抱えながらも援助を求めることのできない母親の存在が指摘されていることから、育児不安と母親の被援助志向性の関連について検討を行う必要があると考える。また、援助を求めることが難しい母親の要因の 1 つとして、母親個人の性格特性が考えられる。木村・水野（2004）が大学生を対象に行った調査によれば、自己隠蔽は被援助志向性に負の影響を与えることが明らかとなっている。しかし、母親を対象とした調査は行われていない。これらのことから、育児不安と自己隠蔽傾向が、母親の被援助志向性にどのような影響を与えているかを検討する（研究 2）。

II. 研究 1 : 「子育て中の母親用被援助志向性尺度」の開発

1. 予備調査

「子育て中の母親用被援助志向性尺度」の項目を作成するために、予備調査を行った。

(1) 方法

1) 対象および実施時期

未就学児を育てる母親 2 名に、2015 年 5 月～6 月に行った。

2) 内容

母親の年齢、職業、子どもの人数・性別・年齢、家族構成、子育てをする上で大変なこと、利用したことのある子育て支援機関、どんなサポートを必要としているかなどの質問を 1 時間ほどのインタビュー形式で実施した。

(2) 結果

インタビュー対象者は 30 代、40 代の母親 2 名でどちらも働きながら子育てを行っていた。インタビューの結果、時間のなさや家事と育児と仕事の両立の大変さが挙げられ、子育てに対する援助を必要としていた。これらの結果を質問項目作成の参考とした。

2. 本調査

「子育て中の母親用被援助志向性尺度」を作成し、信頼性、妥当性を検討した。

(1) 方法

1) 対象および実施時期

関東の A 幼稚園を利用する母親 210 名（有効回答数 146 名）。

2015 年 7 月に配布。郵送にて順次回収。

2) 内容

① フェイスシート

調査対象者の年齢、職業、家族構成、子どもの人数、現在の子育てに対する悩みの程度について尋ねた。なお、悩みの程度は「悩んでいない」1 点から「とても悩んでいる」4 点の 4 件法で回答を求めた。

② 「子育て中の母親用被援助志向性尺度」

母親が子育ての悩みについて他者に援助を求める態度を測定する尺度。項目は、予備調査で得られた回答と「中学生の友人、教師、家族に対する被援助志向性尺度」(本田ら, 2011) の尺度を参考に、臨床心理学を専門とする大学院教員 1 名と大学院生 2 名で 24 個の暫定項目を作成した。なお、本田ら (2011) の尺度は中学生を対象としていたため、子育て中の母親用に質問文を一部変更した。「当てはまる」4 点から「当てはまらない」1 点までの 4 件法で回答を求めた。

③ 被援助志向性尺度

他者に援助を求める態度を測定する尺度。「援助の欲求と態度」、「援助関係に対する抵抗感の低さ」の 2 因子 11 項目からなる (田村・石隈, 2001)。「当てはまる」4 点から「当てはまらない」1 点までの 4 件法で回答を求めた。

(2) 結果

1) 対象者の背景

母親の平均年齢は 38.12 (SD=3.93) 歳であり、最低年齢が 26 歳、最高年齢が 48 歳であった。また、89%が「専業主婦」で最も多く、次いで「常勤」が 9.6%、「非常勤」が 0.7%、「その他」が 0.7%であった。

家族構成は、核家族世帯が 89.3%、核家族以外の世帯が 10.7%であった。子どもの人数は、2 人が 60.3%と最も多く、次いで 1 人が 23.3%、3 人が 13.7%、4 人以上が 2.7%であった。

現在子育てについて悩んでいる程度は、「あまり悩んでいない」45.1%と、「やや悩んでいる」45.8%が大半を占め、「悩んでいない」が 6.9%、「とても悩んでいる」が 2.1%であった。

2) 「子育て中の母親用被援助志向性尺度」の分析

「子育て中の母親用被援助志向性尺度」の 24 個の暫定項目に対して、主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は 6.51, 3.37, 1.75, 1.48, 1.10…というものであり、4 因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度 4 因子を仮定して、主因子法・Promax 回転によ

る因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった 2 項目を分析から除外し、残った 22 項目について再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 1 に示す。

第一因子は 5 項目で構成されており、「子育ての悩みについて、誰に相談したらいいかわからない（逆転項目、以下*で示す）」、「子育ての悩みを真剣に考えてくれる人はいない（*）」などで高い負荷量を示したため「援助資源の自覚」因子と命名した。

第二因子は 8 項目で構成されており、「子育ての問題がある時は、周囲に助けられながら解決していきたい」、「子育てをしていくうえで、困った時は一緒に考えてくれる人がほしい」などで高い負荷量を示したため、「援助への期待」因子と命名した。

第三因子は 6 項目で構成されており、「誰かに子育てについて相談したら、その相談内容が周囲に漏れてしまう気がする（*）」、「子育てについて周囲に援助を求めると、自分が弱い母親だと思われる（*）」などで高い負荷量を示したため、「援助抵抗の低さ」因子と命名した。

第四因子は 3 項目で構成されており、「子育てで困った時は、育児書などの子育てに関する本を読む」、「子育てで困った時は、インターネットで調べる」などで高い負荷量を示したため、「情報希求」因子と命名した。

「子育て中の母親用被援助志向性尺度」の 4 つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「援助資源の自覚」下位尺度得点（平均 3.40, *SD*.61）、「援助への期待」下位尺度得点（平均 3.39, *SD*.43）、「援助抵抗の低さ」下位尺度得点（平均 3.07, *SD*.56）、「情報希求」下位尺度得点（平均 2.58, *SD*.67）とした。

表1. 母親用被援助志向性尺度の因子分析結果(主因子法・Promax回転)

項目	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
第一因子: 援助資源の自覚 $\alpha = .87$				
子育ての悩みについて、誰に相談したらいいかわからない(＊)	.895	.000	-.143	.025
子育ての悩みを真剣に考えてくれる人はいない(＊)	.868	.036	-.141	.134
自分の子育ての悩みを理解してくれる人はいない(＊)	.795	-.041	.029	.025
自分の子育ての悩みを解決してくれる人はいない(＊)	.703	.045	.048	-.139
相談相手が期待通りに応えてくれるか心配だ(＊)	.519	-.150	.262	.072
第二因子: 援助への期待 $\alpha = .80$				
子育ての問題がある時は、周囲に助けられながら解決していきたい	.040	.824	-.104	-.039
子育てをしていくうえで困った時は、一緒に考えてくれる人がほしい	.003	.746	-.062	-.055
子育てをしていくうえで困った時は、アドバイスが欲しい	.138	.692	-.097	.049
子育ての悩みがある時は、誰かに話を聞いてほしい	.100	.671	-.154	-.044
子育てをしていくうえで必要なときは、周囲に援助を求めたい	-.356	.638	.325	.019
子育てについて、誰かに相談するのを感じない(＊)	.324	.506	.060	-.123
子育てを頑張る自分をいたわってほしい	-.380	.445	-.050	.171
子育てに関して、自分のモデルになるような人が身近にいてほしい	-.052	.437	-.141	.221
第三因子: 援助抵抗の低さ $\alpha = .75$				
誰かに子育てについて相談したら、その相談内容が周囲に漏れてしまう気がする(＊)	-.051	-.242	.712	-.019
子育てについて周囲に援助を求めると、自分が弱い母親だと思われる(＊)	.161	-.185	.656	.066
子育ての問題がある時は、周囲に頼らず自力で解決していきたい(＊)	.131	.348	.454	-.121
子育てについて誰かに相談することが面倒だ(＊)	.348	.313	.402	.060
子育てについて誰かに相談する時間がない(＊)	.282	.038	.378	.065
子どもを誰かに預けて外出することに抵抗がある(＊)	-.099	.044	.367	.059
第四因子: 情報希求 $\alpha = .58$				
子育てで困った時は、育児書などの子育てに関する本を読む	.069	-.039	.052	.742
子育てで困った時は、インターネットで調べる	.045	-.015	.051	.573
子育てで困った時は、専門家(保育・医療・行政など)に相談する	.020	.260	.054	.349
因子間相関				
I	-	.338	.602	-.034
II		-	.306	.140
III			-	-.017
IV				-

(＊)は逆転項目

3) 「子育て中の母親用被援助志向性尺度」の信頼性、妥当性の検討

内的整合性を検討するために各下位尺度のクロンバックの α 係数を算出したところ、「援助資源の自覚」で $\alpha = .87$ 、「援助への期待」で $\alpha = .80$ 、「援助抵抗の低さ」で $\alpha = .75$ 、「情報希求」で $\alpha = .58$ であった。「情報希求」の α 係数がやや低値であった。しかし、子育てで困った時は「育児書を読む」「インターネットで調べる」などの特色ある項目であったため、被援助志向性の一面を測定するために必要と考え、尺度に残すこととした。

次に基準関連妥当性の検討のために、「子育て中の母親用被援助志向性尺度」と、被援助志向性尺度（田村・石隈，2001）との相関係数を算出した。その結果、「子育て中の母親用被援助志向性尺度」と被援助志向性尺度との間には強い相関（ $r = .657$ ）が示され、基準関連妥当性があることが示された。

III. 研究2：「子育て中の母親用被援助志向性尺度」を用いた関連要因の検討

研究1で開発した尺度を用いて、以下の仮説をたてて、母親の被援助志向性と母親の心理的特性について検討した。

仮説1 育児不安が強いと、母親の被援助志向性は高い。

仮説2 自己隠蔽が弱いと、母親の被援助志向性は高い。

(1) 方法

1) 対象および実施時期

研究1と同様である。

2) 内容

① 「子育て中の母親用被援助志向性尺度」（表1）

母親が子育ての悩みについて他者に援助を求める態度を測定する尺度。研究1にて研究者らが作成。「援助資源の自覚」，「援助への期待」，「援助抵抗の低さ」，「情報希求」の4因子22項目からなる。

② 育児不安尺度

育児中の養育者に生じる不安を問う尺度。子育てに対する不安や心配を示す「中核的育児不安」，子どもに対するネガティブな感情を示す「育児感情」，子育てによって時間が制約されていると感じる程度を示す「育児時間」の3因子24項目からなる（手島・原口，2003）。「当てはまる」4点から「当てはまらない」1点までの4件法で回答を求めた。

③ 日本語版自己隠蔽尺度

個人的な情報を他者から積極的に隠蔽する傾向を問う尺度で、1 因子 13 項目からなる（河野, 2000）。「当てはまる」4 点から「当てはまらない」1 点までの 4 件法で回答を求めた。

(2) 結果

「子育て中の母親用被援助志向性尺度」を従属変数、育児不安尺度の下位尺度である「中核的育児不安」、「育児感情」、「育児時間」と自己隠蔽尺度を独立変数として重回帰分析を行った結果、「子育て中の母親用被援助志向性尺度」に対して、「自己隠蔽」（ $\beta = -.33$, $p < .001$ ）と「育児感情」（ $\beta = -.28$, $p < .01$ ）は負の影響、「中核的育児不安」（ $\beta = .22$, $p < .05$ ）は正の影響を与えていた（表 2）。

表2. 母親の被援助志向性に対する育児不安、自己隠蔽の影響

	母親用被援助志向性
	β
自己隠蔽	-.33 ***
中核的育児不安	.22 *
育児感情	-.28 **
育児時間	-.15
R^2	.21 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

β = 標準偏回帰係数

IV. 考察

本研究の目的は、母親を対象とした被援助志向性尺度を開発し、その妥当性と信頼性を確認することと、母親の被援助志向性と関連する要因を検討することであった。

まず、研究 1 にて母親を対象とした被援助志向性尺度として「子育て中の母親用被援助志向性尺度」を作成し因子分析を行った。その結果、全 22 項目で「援助資源の自覚」、「援助への期待」、「援助抵抗の低さ」、「情報希求」の 4 因子から構成されていた。1 因子で信頼性がやや低い因子があった以外は信頼性は認められ、基準関連妥当性も示された。そのため、この尺度は被援助志向性が低く、支援に繋がりにくい母親のスクリーニングや母親の被援助志向性との関連要因を検討していくうえで有用であると思われる。一方で、本研究では調査対象者が幼稚園児の母親に限られていたため、今後は保育園を利用している母親や、働きながら子育てをする母親など調査対象者を広げて信頼性及び妥当性を確認していく必要がある。また、乳幼児を育てる母親に限らず、様々な子どもの発達過程に適し

た「子育て中の母親用被援助志向性尺度」を開発していくことが望まれる。

次に、研究 2 にて母親の被援助志向性と関連のある要因を検討するために、2 つの仮説を立てて重回帰分析を行った。その結果、仮説 1「育児不安が強いと、母親の被援助志向性は高い」は一部が支持され、仮説 2「自己隠蔽が弱いと、母親の被援助志向性は高い」は支持される結果となった。

先行研究では、悩みの深刻さが被援助志向性に影響していることが示されている（永井，2010）。本研究でも育児不安が母親の被援助志向性に影響していることが明らかとなったことから、悩みは被援助志向性を促進する要因であるといえる。また、母親個人の性格特徴である自己隠蔽の強さが、被援助志向性を抑制する要因として大きく影響していることが示された。小嶋（2004）や状家（2015）によって、子育ての悩みを抱え、援助を必要としているにも関わらず積極的に援助を求めようとしない母親が指摘されているが、今回の結果から、このような母親は、悩みを抱えていても、自己隠蔽傾向が高いために援助を求めることが難しい可能性が示唆された。

これらの結果から、今後母親の被援助志向性について研究を積み重ねていくうえで、母親の抱える悩みの程度だけでなく、自己隠蔽という母親個人の性格特性にも注目していく必要性が示された。また、援助に繋がりにくく、支援の目から漏れてしまっている母親を減らすためにも、母親から援助を求められるのを待つだけでなく、支援者からの積極的な介入が重要であろう。

本論文に関し、開示すべき利益相反（COI）関係にある企業などはない。

V. 引用文献

- 本田真大・新井邦二郎・石隈利紀(2011). 中学生の友人、教師、家族に対する被援助志向性尺度の作成. カウンセリング研究, **44**, 254-263.
- 状家莉保(2015). 育てにくさを感じている母親への支援の検討—被援助欲求と具体的な育児サポートに着目して. 神戸大学発達・臨床心理学研究, **14**, 7-11.
- 河野和明(2000). 自己隠蔽尺度(Self-Concealment Scale)・刺激希求尺度・自覚的身体症状の関連. 実験社会心理学研究, **40**, 115-121.
- 木村真人・水野治久(2004). 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友だち・家族に焦点をあてて. カウンセリング研究, **37**, 260-269.
- 小嶋玲子(2004). 母親たちの子育てに対する現状認識と必要としている援助. 桜花学園大学保育学部研究紀要, **2**, 59-74.
- 永井智(2010). 大学生における援助要請意図—主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因. 教育心理学研究, **58**, 46-56.
- 日本労働組合総連合会(2013). 子ども・子育てに関する調査. <http://www.jtuc-rengo.or.jp/news/chousa/data/20130621.pdf> (2015 年 12 月 3 日取得)
- NPO 法人 子育て学協会(2014). 幼児期の子育てに関する悩み調査.

<http://kosodategaku.jp/wp-content/uploads/2014/03/38d2e046eb5052f98404c117a99bbff1.pdf>

田村修一・石隈利紀(2001). 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究—バーンアウトとの関連に焦点をあてて. 教育心理学研究, **49**, 438-448.

田村修一・石隈利紀(2002). 中学校教師の被援助志向性と自尊感情の関連. 教育心理学研究, **50**, 291-300.

手島聖子・原口雅浩(2003). 乳幼児健康診査を通した育児支援—育児ストレス尺度の開発. 福岡県立大学看護学部紀要, **1**, 15-27.